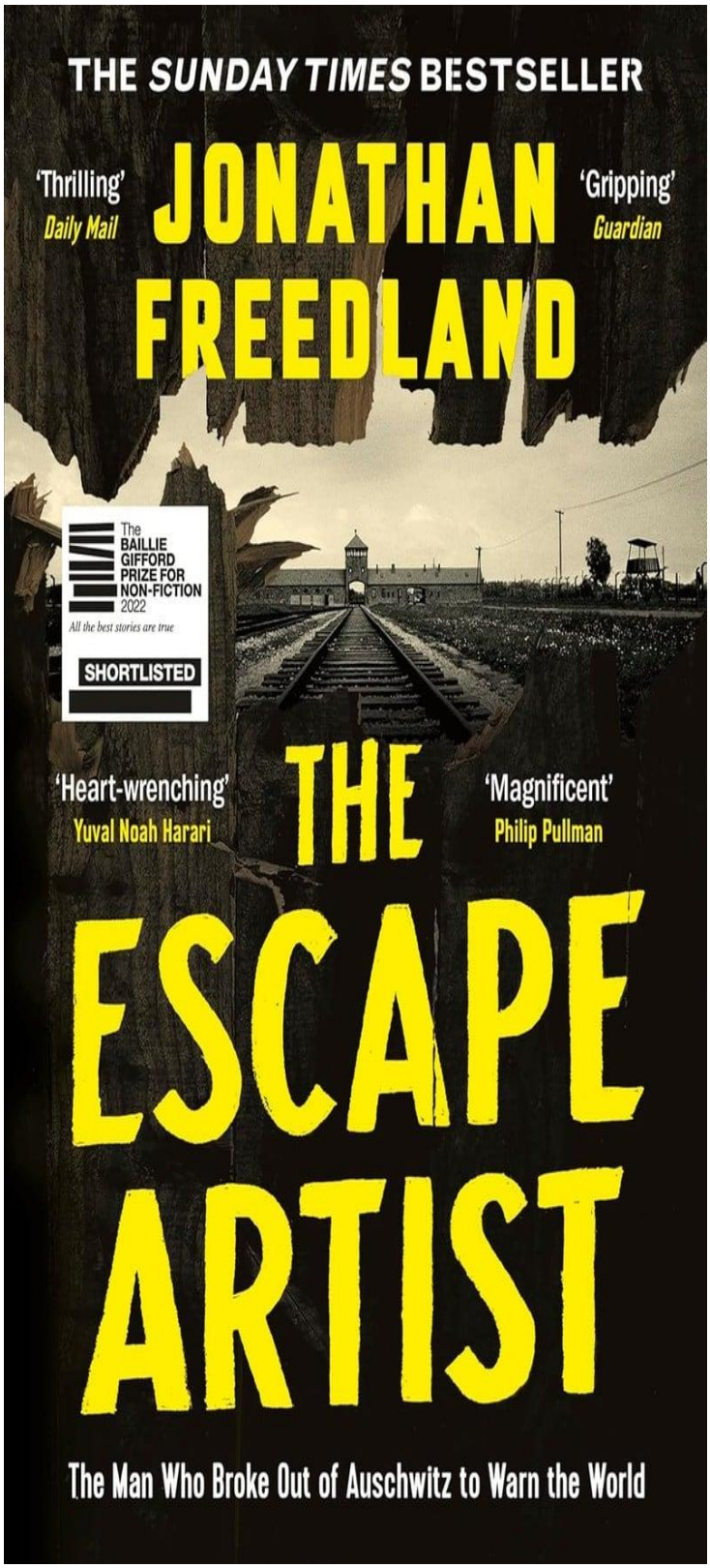
ガーディアン紙のシオニスト門衛、ホロコースト史を塗り替える

トニー・グリーンスティン、脇浜義明訳、大賀英二補訳

The Electronic Intifada、2024年８月22日



ジョナサン・フリードランド Freedland は、英紙「ガーディアン *The Guardian*」の上級記者、そして『ユダヤ人クロニクル *Jewish Chronicle*』のコラムニストでもある。彼は、『ユダヤ人クロニクル』の恥部を隠すイチジクの葉の役割を担う、リベラル・シオニストだ。

それだから、フリードランドがスロバキア系ユダヤ人の生化学者ルドルフ・ヴルバ Vrba について書くことを選んだのは驚きだった。

1944年4月10日、ヴルバ（ヴルバはペンネームで、本名はウォルター・ローゼンバーグ）はアルフレッド・ヴェツラー Wetzler（ペンネームはヨゼフ・ラーニク）とともにアウシュヴィッツを脱走したが、それはヨーロッパで生き残った最後の、かつ最大のユダヤ人社会を絶滅させるというナチスの計画をハンガリーのユダヤ人に警告することを目的としたものだった。

このユダヤ人ホロコーストの英雄について、この本を書こうとするフリードランドの問題は、ヴルバがシオニストではなかったことだ。この著作『牢破り名人：世界に警告するためにアウシュヴィッツから脱出した男』（Jonathan Freedland & John Murray, The Escape Artist: The Man Who Broke Out of Auschwitz to Warn the World , 2023.）に書いてある通り、シオニスト運動というものは、彼らシオニストがナチスに協力した（ナチ政権の握っている権力を、ユダヤ人のパレスチナ移住促進に利用しようとした）がために、事実上、ユダヤ人の反ナチス・レジスタンスという英雄はいないことが一つの問題だった。

批判的なシオニストの歴史家ノア・ルーカスは、「ヨーロッパにホロコーストが起きたとき、ベン・グリオン（後にイスラエル初代首相となった David Ben-Gurion）はそれをシオニズム運動にとって絶好の機会と見た… 彼は、他のシオニスト指導者以上に、ヨーロッパの悲劇的混乱とユダヤ人虐殺のダイナミクスの中に絶好の可能性を感じ取った… 平和時ではシオニズムは世界（ヨーロッパ）のユダヤ人を大量にパレスチナに移住させることが不可能なのは明らかだった。だから、ヒトラーの恐怖をシオニズムにとって有利になるように利用すべきである… 1942

年の終わり頃には… （ヨーロッパ・ユダヤ人を虐殺から救うよりも）ユダヤ人国家建設が最も重要な関心事になっていた」と書いた[1]。

ナチへのレジスタンスとして戦った非常に数少ないシオニスト、例えばチャジュカ・クリンゲル[2]のような戦士は、シオニスト運動が果たした役割を厳しく批判した。

私が最初に批判した本は、『牢破り名人』というタイトルであった。ヴルバがまるで奇術師フーディーニのような奇抜な芸当を行ったという印象を与えるのだ。実際、フリードランドはそのような類似を述べている。それが、ヴルバの勇気ある英雄的行為を卑下し矮小化することに成功していると、私はフリードランドの本を批判した。ヴルバは牢破りの名人でもなければ、奇術師でもない。勇気と、正しい判断、そして純粋な幸運で生き延びた人である。

ヴルバにはシオニズム運動を嫌う正当な理由があったのだが、しかしフリードランドはその点が本の中で彼の伝記として現れないよう、注意して書いていた。

ウォルター・ローゼンバーグとして生まれたヴルバは、1939年にヒトラーが侵攻してチェコスロバキアから分離させてナチの衛星国にしたスロバキアで暮らしていた。ローマ・カトリック司祭のアンクレイ・フリンカが率いるスロバキア人民党が統治し、大統領はカトリック司祭のヨゼフ・ティソで、ナチの傀儡政権であった。

フリードランドの本は、１７歳の少年ヴルバが1942年２月に国外追放の出頭命令を受けたときの様子を描いている。スロバキアは自国民であるユダヤ人を国外追放した最初の国であった。1942年３月から10月までの間にスロバキア・ユダヤ人88,000人のうち57,000人が輸送列車に乗せられ、運ばれた。

『頭がおかしくなりそう』 “I must be going mad”

通知を受けた一月後の３月、ヴルバはハンガリーへ逃げてブダペストで社会主義者の地下組織と接触した。フリードランドの本には書いていないが、ヴルバは、地下組織といっしょに暮らした後で、ハンガリー・シオニストを訪れた。その時の模様をヴルバは次のように自叙伝に書いている。

> その日の午後、私はブダペストのシオニスト機関の本部であるユダヤ人援助組織（OMZsA）へ行った。そこで３０代半ばの厳しい顔つきの男に自分のことを詳しく話した。彼はしばし黙って考えてから、「つまり君は不法入国でブダペストへ来ているんだな。そうなんだな」と言った。
>
> 「そうです。」
>
> 「自分が法を破っていることを分かっているのか？」
>
> 私はそうだと頷いたが、いったいこんな頭の固い人間がこんな重要な仕事を続けることができるもんだなと、心の中で思った。
>
> 「正式な証明書類もないのにここで仕事を見つけたいのか？」
>
> 「偽書類を作ってくれれば何とかなります」
>
> 彼は、私がタルムードを破り捨てて足蹴にしたかのようにびっくり仰天して、口を２，３度大きく開けてから、「お前を警察に引き渡すのが私の義務であることが分かっていないのか？」と怒鳴った。
>
> 今度は私がびっくり仰天して口をあんぐり開けた。シオニストがユダヤ人をファシスト警察に渡すとは！
>
> 私は気が狂いそうになった。
>
> 「出て行け！すぐにここから出て行け！」
>
> 私はまったく頭が混乱して出て行った。OMZsAがどういうもので、そこの人間が何をしているのかが分かったのは、それから３年後であった。

---

[1] ホロコーストとシオニズムの関係に興味があれば、拙訳書トム・セゲフ著『７番目の百万人』（ミネルヴァ書房．2013年）を参照してください

[2] ベンジン・ゲットーのユダヤ人戦闘組織のリーダーChajka Klingerで、ゲシュタポの拷問から脱走してイスラエルへ着いた最初のゲットー戦闘員。

信憑性 Credulousness

フリードランドは、ヴルバ本人をインタビューしたことも会ったこともない。彼は、ヴルバと仲たがいして別れた元・妻のゲルタ・ヴルボヴァの話を聞いただけである[3]。　では、フリードランドは何を思って、「二人の愛の営みには、彼女が切望していた優しさや労わりが欠けていた。その代わりに、彼女には彼の愛情が暴力の痕跡を帯びていると感じたようだ」などと確信したのだろうか。

これはわいせつ以上のものだ。それは、ヴルバの人格に関して疑問の種をまく行為だ。ヴルバの義理の娘のジェーン・ベネットはヴルバを「素敵な、しかも控え目な人」という思い出を抱いている。フリードランドは、「彼らが聞いたのはルディ（ヴルバ）の側の険悪な家族の話だった 」とコメントしている。まあそうだけど、フリードランドも同じだ！

フリードランドの本はハードカバーの一年後にペーパーバックを出すことができたから、ベネットのルドルフ・ヴルバに関する別の側面からの話をそこに載せることが出来た。彼女によると、ルドルフが娘二人にプレゼントを贈ると、プレゼントは封も明けられずにそのまま送り返されてきた。フリードランドが軽信した元・妻のゲルタが元・夫へ復讐したのである。こういう意地悪については、ゲルタはフリードランドに話さなかったようである。

この伝記は、私心なしに客観的にヴルバの人生を語るものではない。フリードランドには最初から隠れた政治的意図があった。ホロコーストのときのシオニズム運動の記録を塗り替えることであった。ヴルバはハンガリーのシオニズム運動がハンガリー・ユダヤ人の絶滅に手を貸したと批判する先鋒であった。

ヴルバとヴェツラーは、二人がアウシュヴィッツを脱出して、スロバキアのジリナにあったユダヤ人評議会の事務所へ行ったとき、すぐに当時唯一のナチの絶滅キャンプだったアウシュヴィッツで起きていることを書き始めた。二人が書き上げたヴルバ・ヴェツラー報告書（VWR またはアウシュヴィッツ・プロトコルとして知られている）は、アウシュヴィッツが一般に言われているような強制収容所とか強制労働所ではなくて絶滅キャンプであることを初めて世に明らかにした。

ヴルバとヴェツラーは、800,000人を超えるハンガリー・ユダヤ人を受け入れて殺害する準備がアウシュヴィッツで着々と進められていることを世間に知らせようと必死であった。

ホロコーストに関する警告 Warning about the Holocaust

このヴルバ・ヴェツラー報告書 VWR は、1944年４月26日に仕上げられて、４月29日にハンガリー・シオニズム運動の指導者ルドルフ・カソトナー（レゾー・カソトナー Rezső Kasztner とも呼ばれる）に渡された。カソトナーは、VWR を配布してハンガリーでユダヤ人に輸送列車に乗ったらどうなるかを知らせずに、同書を封殺した。そして、この報告書はホロコースト主犯のアドルフ・アイヒマンとの裏取引により、シオニストとユダヤ人金持ちエリートがハンガリーを脱出する列車を用意するために使われた[4]。

1944年６月、カソトナーの親族、シオニスト指導者、カソトナーが所属するマパイ党の幹部、カソトナーに金を払ったユダヤ人金持ちなど1684人はハンガリーを出発、最初はベルゲン・ベルゼン強制収容所へ向かい、そこからスイスへと向かった。その一方で、同年５月15日から７月８日（７月８日にハンガリー支配者ミクローシュ・ホルティが国外追放列車の中断を求めた）の間に、437,000人のユダヤ人がアウシュヴィッツへ送られた。そのほとんどは着くと同時にガス室へ送られた。

フリードランドはカソトナーが VWR を配布しなかった理由を曖昧にして、アウシュヴィッツの本当の姿をハンガリーのユダヤ人から見えなくしたばかりか、誤った情報を流した彼の役割を不問にしている。

数年後、イスラエルで、同じくハンガリー・ユダヤ人のマルキエール・グルエンワルド Gruenwald がカソトナーをナチ協力者として告発した。その頃にはカソトナーはイスラエル政府高官になって

---

[3]妻の名はゲルタ・シドノラで、ヴルバと結婚してヴルボヴァとなった。夫婦の間には娘二人。スロバキアがソ連に占領された頃に離婚、ヴルバはイスラエルへ、ヴルボヴァは英国へ渡った。

[4]他に数千ドルをアイヒマンに渡した。カソトナーは「すべて世界シオニスト機構の指示でやった」と裁判の中で述べた。

いたので、政府の指示で彼はグルエンワルドを名誉棄損で訴えた。しかし、この名誉棄損裁判は事実上、カソトナー裁判となってしまった。

カソトナーは、ナチを裁くニュルンベルク裁判でナチのハインリッヒ・ヒムラーの手先だったSS中佐のクルト・ベッヒャーBecher を有罪にする証言を拒否し、化けの皮が剥がれ始めた。グルエンワルドの弁護士シュムエル・タミールはベッヒャーを擁護するカソトナーの宣誓供述書を証拠として提出した[5]。その後、カソトナーが他のナチ戦犯、アイヒマンの手下の殺し屋ディーター・ヴィスリツェニーやヘルマン・クルメイなどを庇う証言をしたことも、明らかになった。

ナチの味方 Standing up for Nazis

フリードランドは、カソトナーが大量殺戮犯のナチを庇う証言をした理由として、「たぶん追い詰められたナチへの同情というよりは、脅迫された人間が抱く自分をさらけ出すことへの恐怖であろう」と説明した。

この「説明」はフリードランドとしては今までにはない性質の説明である。命がけの裁判にかかっているナチ戦犯は、誰かを脅迫する立場にはない。カソトナーは自分を守るためだけでなく、ユダヤ機関と世界ユダヤ人会議を守らなければならないという脅迫観念に駆られ、証言したり証言を拒否したのだろう。

イスラエル最高裁判所はカソトナーの上訴[6]を受け入れた（カソトナーは1957年にシン・ベト工作員によって暗殺されていた）。カソトナーが少数の金持ちや政治家ではなく、多数の一般ユダヤ人救出に努力していたことを最高裁が認めたから上訴を受け入れたのだと、フリードランドは本の中で暗に仄めかしているが、それは実際にあったこととは真逆である。最高裁はそんなことは言っていない。

検事総長のハイム・コーヘンは上訴に関する調査を行い、次のように論じた。

> 正しいか間違っているか別にして、カソトナーは、100万人のハンガリー・ユダヤ人の運命は絶望的なので、そのことを100万人に知らせないで、少数の者だけを救出することに専念するしかないと考えたのだ。数百人を救うためにナチと取引することはできるが、百万人に絶滅計画を教えることは出来ないと判断したのだ… そうするのが自分の任務だと考えたのだ… パレスチナへの移民を促進するために多くの者の中から少数の者を選び出すのは我々シオニスト運動の伝統である… そのことで裏切者扱いされてよいのだろうか？

最高裁のミシャエル・チェシン判事は最高裁裁判官たちの意見をまとめて、次のように言った。「一人の人間がコミュニティ全体の絶滅危機を知った。そんな絶望的情勢の中で彼は百万人を救う努力をするべきなのだろうか。百万人から真実を隠す努力が行われているときに、その真実をみんなに知らさなければならないのか？」

要するに、歯切れの悪い最高裁の判決は基本的に法に基づくものでなく、政治的なものであった。

チェシン判事が言ったのはイスラエルのシオニスト体制の恐れを表現したものであった。「もし我々は、カソトナーが（カソトナーの故郷の）クルジュでアウシュヴィッツ行きの列車に乗るユダヤ人に絶滅に向かっていると告げることをしなかったことで、カソトナーを敵と協力したと判決したとすれば、これまでの歴史で危機のときに沈黙した指導者、自分が知っていることを他の人に知らせなかった指導者全部を法廷へ引きずり出さなければならなくなる。」

無知 Ignorance

謙虚な男という触れ込みで、フリードランドは「『牢破り名人』を賞賛する」というタイトルの本の執筆を始めているが、それは彼の著作『牢破り名人』の素晴らしさよりは、彼を崇拝する者ちちの無知を表現する例を39件も集めたものだ。「魅惑的」「ワクワクする」「素晴らしい」等々の形容詞の羅列である。

---

[5]供述書には「ベッヒャー氏がユダヤ人絶滅計画に反対する立場に立つ勇気をもって、人命を救おうとした数少ないSS士官のひとり」という文言がある。

[6]1955年６月地方裁判所は、カソトナーは「魂を悪魔に売った」という判決を出した。この判決の影響で1957年にカソトナーは暗殺された。1958年に最高裁がカソトナーの上訴を受け入れて、地方裁判所の判決を覆した。

英国の著作家で弁護士のジェイミー・サスキンドは、「ホロコーストに関してこれまで読んだ本の中で最良の本であるばかりでなく、最も重要な本である」と言った。英国のシオニスト歴史家のサイモン・シャマは、フリードランドの本は「没入でき、最終的に心を救済する」と言った。英国の俳優トム・ホランドは、『牢破り名人』は「アンネの日記』やアウシュヴィッツ生還者のプリーモ・レーヴィの『これが人間か』と並ぶ作品だと言った。

このようなフリードランド崇拝者に私が勧めたいのは、ヴルバの著書『私は許せない』[7]を読むことだ。ヴルバの本に書かれている歴史的重大さはフリードランドの本にはまったくないことが分かるであろう。『アンネの日記』や『これが人間か』と肩を並べるのはヴルバの本であって、フリードランドの安っぽい模擬スリラーではない。

『フィナンシャル・タイムズ』によれば、「ヴルバはほとんど世間から忘れられて、死んだ。」米国のノンフィクション作家のメリッサ・フェイ・グリーンは「今までヴルバの名前を知らなかった」と言い、歴史捏造と文学操作で世界支配のＳＦ『ウィドウランド（Widowland, 2021)』を書いたＣ．Ｊ．キャリーはヴルバの書いたものを、「ほとんど知られていない物語だ」と言った。

ここで大切なことは、何故ヴルバがほとんど知られていないかを問うことだ。ホロコーストに関してはたくさんの本や論文がある。それにも拘わらず、アウシュヴィッツを最初に脱出したユダヤ人（SSヴィクチル・ペステクの同行でアウシュヴィッツを脱走したチェコのユダヤ人、ジークフリート・レデラーは別にして）の名前がホロコースト史、とりわけアウシュヴィッツ史からほぼ完全に抜けているのは、いったい何故なのか？

単純な答えは、イェフーダ・バウエル Bauer やイスラエル・グートマン Gutman に導かれるシオニストのホロコースト研究者がヴルバとヴェツラーにまったく触れなかったことを、それが良心的な決断だと判断したためである。フリードランドがシオニストのそういう歴史の歪曲を正当化したのは、ホロコーストの歴史をシオニズムが独占する必要があったとするからである。

歴史の改ざん Manipulation of history

フリードランドは、「イスラエルに於いてですら… ヴルバとヴェツラーは記憶されていなかった」が、ヴルバの回想録が1998年にイスラエルの国語であるヘブライ語に翻訳されたのは、ハイファ大学の教授ルース・リンの「根気強い活動」のおかげであった、と書いている。「イスラエルの国立ホロコースト・アーカイブであり追悼記念館であるエルサレムのヤド・ヴァシェム Yad Vashem[8]でさえ、『アウシュヴィッツ・プロトコル』は著者名も記さずにファイルされていた」とも書いている。

さらにフリードランドは、「イスラエルでもユダヤ人ディアスポラの主流社会でも、ヴルバは受けが良くなかったので」、二人のアウシュヴィッツ・脱出者の作品が匿名化されていたのは容認できると書いている。

しかし、ヴルバの回顧録が出版された時代は、ディアスポラ社会だった。「一年に一度立ち止まって」ホロコーストのシオニスト版（ナチ時代にヨーロッパ・ユダヤ人が経験したレイシズムを正当化するような、都合の悪い情報を取り除いたホロコースト）を追悼する国家イスラエルの下での出版ではなかった。

フリードランドは歴史的記録を捻じ曲げて、ヴルバを「信用できないホロコースト証言者にしたのは、彼がユダヤ人をシオニストとして非難する傾向があったからである」と書いたが、これは全くのウソである。ヴルバは絶えず注意深くシオニストとユダヤ人を区別した。それを区別しないのはフリードランドである。

フリードランドの本は、歴史の記録をシオニズム英雄主義という偽りの談話に合致させるために操作・変形させる過程の一つである。フリードランドはヴルバがイスラエル支持者で、イスラエル建国は「ユダヤ人にとってよいこと」だったとして、「応援した」かのように見せかける。

ヴルバがある種のシオニストだったという考えは馬鹿げている。フリードランドはそう主張したが、証拠を何一つ挙げていない。それどころか、ハイファ大学の教育学教授であるルース・リンに

---

[7] Rudolph Vrba & Alan Bestic: I Cannot Forgive, Regent College Pub, 1997.

[8]「名前と記憶」の意味。この追悼記念館を検討していたとき、ホロコースト犠牲者のほとんどはまだ生きていた。イスラエル指導部はホロコーストを独占して、賠償金を取る計算をしていた。

初めて出会ったとき、フリードランドは「あなたの国のユダヤ人評議会やカソトナーのような人物」には興味がないと言った[9]。
　戦後、ヴルバはチェコスロバキアで生化学研究者として雇用された。しかし、時が経つにつれ、彼はスターリン主義のチェコスロバキアに不満を抱き、西側に逃げる決心をした。
　まずヴルバは、帰還法によって国籍が取れるイスラエルへ行った。「これはシオニストが故郷へ帰る旅であった」とフリードランドは書いたが、そんなものではなく、西側の玄関口としてイスラエルへ行っただけであった。
　ヴルバは、「イスラエルが好きになれなかった… また、絶えず迫害される民族という物語にも心を動かされなかった… もっと苦々しいものがあったからだ。彼は新しい国、とりわけその指導層をじっくりと見た。そこで彼が見たのは、わずか15年前に歴史的試練に直面してそれに対応しなかったと彼が判断したシオニスト指導者と、まったく同じ指導者の姿であった。」
　フリードランドは、「彼は、カソトナーはもちろん、初期のイスラエル指導者などユダヤ人を裏切ったと彼が判断するシオニストに対する怒りを抑えることができなかった」とヴルバについて書いている。

真実を封印する Silencing the truth

　フリードランドはヴルバのシオニズムへの態度を、ブタペストのパレスチナ事務所のモシェ・クラウス所長のような、ナチとの協力を拒否した数少ない人間を取り上げて、問題とした。
　モシェ・クラウス等の事例は事実である。私は自著『ホロコーストの間のシオニズム：国家と民族に仕える記憶の武器化』(*Zionism During the Holocaust: The weaponisation of memory in the service of state and nation*, 2022) の中で、20万人のユダヤ人救出に貢献した米国の戦争難民局を1944年に立ち上げた運動は、当時主流派労働党シオニズムに対する反体制派であった修正シオニストのシュムエル・マーリンとピーター・ベルグソンが行ったことを書いた。しかし、その運動は米国のシオニスト指導者スティーヴン・ワイズやナフム・ゴールドマン[10]らによる激しい反対に逆らって行われた。
　フリードランドは、「シオニズムはイスラエル建国のためには大量のヨーロッパ・ユダヤ人を犠牲にする覚悟があるという言外の示唆」があったことについて、書くことは書いている。しかし、それは言外の示唆以上のものだった。シオニスト指導者たちはユダヤ人救済よりは「ユダヤ人国家」の建設の方が大切だと何度も繰り返して明言した。
　フリードランドは、そのことから生じるホロコースト史の歪曲を批判しないで、ヴルバの口を封ずることを正当化した。何故なら、「ルドルフ・ヴルバの主張を取り上げるのは危険を及ぼすことになるから」であった。誰にとって、何にとって危険なのか？　真実にとってか、それともホロコースト史のシオニスト的書き換えにとってか？
　フリードランドは、ヴルバの経歴と記憶を悪用する一方で、ヴルバが「自分の主張が受け入れられ易くするためにメッセージをもっとソフトにする」気がなかったと嘆いている。しかし、何故ヴルバはメッセージをソフトにすべきだったのであろう？ 歴史家はみんなそうすべきなのだろうか？ 時の政治的気分に合わせるためにか？ それとも、真実を語ることの方がもっと重要なのか？
　もっと悪いことに、ヴルバはカソトナーのようなシオニストが「ヒトラーと同じように『支配者民族 master race』信仰を持っていた」と考えていた。現在ガザで見られるように、そのような信仰はシオニズムにとって不可欠なものと想える。
　イェフーダ・バウエルがヴルバを歴史から抹殺しようとしたのは、シオニストの歴史家が主張する 「ユダヤ人の指導者やシオニズムなどに対する深い憎悪 」のためだとして、フリードランドは彼を正当化している。バウエルは、アウシュヴィッツ・プロトコルとアウシュヴィッツの秘密が知られていたとしても、ハンガリーのユダヤ人はそれを信じなかっただろうと主張し、カソトナーを擁護する主要な人物の一人である。

絶望の表現 Representation of despair

---

[9] ユダヤ人評議会はナチ占領下の東欧でユダヤ人ゲットーの運営を任されたナチ下請け機関で、カソトナーはその幹部

[10] 世界ユダヤ人会議の創設者で議長、及び世界シオニスト機構の議長を務めた人物。

ここでは上述のインチキ議論 — 知らないことを知らせるのが良いか悪いかという屁理屈－を分析しない。問題は、カソトナーにはハンガリー・ユダヤ人のためにアウシュヴィッツの秘密を隠す方が良いと決定する権利はないことである。

ハイム・コーヘン検事総長は上訴したカソトナーを擁護して、次のように語った。

> 絶滅実行主犯のアイヒマンは、自分がユダヤ著名人の救済を許可してもユダヤ人大衆はおとなしくて抵抗しないことを知っていた。自分の命令で「ユダヤ著名人救出列車」を出発させても、ユダヤ民族絶滅を促進できることを知っていた… ハンガリー・ユダヤ人全員をガス室へ送る予定でも600人の著名ユダヤ人の救出列車を仕立てる権限はアイヒマンにある。その権限があるだけでなく、彼は必ずそのように行動する人間なのだ。

最高裁の中でただ一人異論を唱えた判事のモシェ・ジルベルグは、事実としてカソトナーがユダヤ人絶滅を促進させたとしても、彼をナチに協力した犯罪者とは言えないという議論を猛烈に批判した。これは単なる「無知」なのか？　それとも「どうにもならない状況の中の絶望の表現なのか？　いったいカソトナー一人が、いや例え何人かの協力者がいたとしても、80万人を代表して絶望を表現できるのか？… そのような議論が本当だと主張するなら、それに対しては『何の権威によって』か『いかなる根拠によってか令状を開示せよ quo warranto』と問わざるを得ない。」

フリードランドは、ヴルバが「世間がホロコースト生存者に期待する像に適合するのを拒否した」と書いている[11]。フリードランドはヴルバの真実を語る強い意志を賞賛しないで、彼を黙らす人々の味方をした。

反ユダヤ主義者と協力してナチによる犠牲者の救出を妨害したのは、ハンガリー、パレスチナ、米国のシオニスト運動の指導者であった。

スティーヴン・ワイズやナフム・ゴールドマンは異議を唱える修正シオニストのマーリンとベルグソンを米国から国外退去させようとした。戦後のイスラエルでは、ブダペストのシオニスト機関の職員クラウスは、カソトナーに関してユダヤ機関に不服を申し立てたが、そのために首になった。

アウシュヴィッツ・プロトコルの抑制 Suppressing the Auschwitz Protocols

ルース・リンは、ヴルバとアウシュヴィッツ・プロトコルがほとんど社会で知られていないのは偶々そうなったのでなく、バウエルやヤド・ヴァシェムらのシオニスト歴史家がヴルバを歴史から抹殺しようとした、その意図的な働きの結果であることを明らかにする本を書いた。

フリードランドは、その本『アウシュヴィッツからの脱出：忘却の文化』（Ruth Linn: Escaping Auschwitz: A Culture of Forgetting(Psychoanalysis and Social Theory, Cornell University Press, 2004) を自分の『牢破り名人』の参考文献一覧の中に記してはいるが、引用はしていない。多くの点で、フリードランドによるヴルバ伝は、ルース・リンの言う「抹殺プロセス」への応答なのだ。リンは次のように書いている。

> 二人のアウシュヴィッツ脱出者はハンガリー・ユダヤ人の運命を正確に予測したのに、彼らが予測出来なかったのは、自分たちが戦後に書いた回顧録や報告がイスラエルのヘブライ語読者が読めない状態にされるということだった… 私はイスラエルの名門の私立高等学校を卒業したイスラエル生まれのイスラエル人で、たくさんのホロコースト記念行事に参加したけれど、二人のアウシュヴィッツ脱出者のことは聞いたことがなかった。また、学校のヘブライ語教科書にも二人のことはきちんとした形で載ってなかった。

リンは、ヤド・ヴァシェムをはじめ、イスラエルの出版社が脱出者の書いたものに全く関心を寄せなかったと書いた。そこで彼女はイスラエルの歴史家の群れがアウシュヴィッツ脱走秘話を間違った名称で、間違った報告で、誤解を与える間違った表現をしている例を辿る作業にとりかかった。

リンは、バウエルが書いた有名なヘブライ語の著作『ホロコースト：歴史的側面 』（*The Holocaust: Some Historical Aspects*）を、一例として挙げた。バウエルはアウシュヴィッツ脱走に一行だけ与えたが、二人の脱走者の名前を書かなかった。バウエルと彼の仲間のヤド・ヴァシェムの歴

---

[11] シオニストはたくましく強く戦うユダヤ人なのに、ホロコースト犠牲者は弱いユダヤ人だとさげすむ風潮が、イスラエル建国前のユダヤ人社会イシューブにあった。

史家イスラエル・グートマンが1994年に出版した英語版ではアウシュヴィッツ脱走者のことを詳しく書いたのに、ヘブライ語版ではそれを省いた。

1999年、やっとヴルバの回顧録がヘブライ語で出版された１年後、「ついにアウシュヴィッツ脱走者の話がグートマンの高校生用著作物の中に入れられた。」リンが書いたように、「ユダヤ人指導者に批判的な非シオニスト・ユダヤ人の個人的脱出の物語がイスラエル国を支配している『集団的オーラ』とつり合いが取れるようになったのか？」

シオニズムは、常に反ユダヤ主義者の中に友人を見出してきた。シオニズム運動の創設者テオドール・ヘルツルは自分の日記の中に「反ユダヤ主義者は我々が最も頼りにできる友人であり、反ユダヤ主義国は我々の同盟国である」と書いている。イスラエルの現首相のベンジャミン・ネタニヤフが「ハンガリーのトランプ」と呼ばれるハンガリー首相のヴィクトル・オルバーンと仲が良いのもその一例となる。

不都合を削除した伝記 Sanitized biography

フリードランドはヴルバの私的文書類を手に入れたが、それの活用の仕方は、控えめに言っても、問題が多い。今やヴルバも彼の最初の妻ヴルボヴァも死んでいるので、フリードランドはそれらの文書類をアカデミックなアーカイブに渡し、誰でもがそれを読んでフリードランドの解釈が歪んでいるかどうかを判断できるようにする義務がある。

フリードランドは、2015〜2019年の間、英国労働党の中でコービンらをやり玉にあげた反ユダヤ主義でっち上げ運動の主役であった。だから彼が非シオニストのユダヤ人ホロコースト英雄を取り上げて本に書いたのは、控え目に言っても、奇妙である。どうも彼がヴルバの伝記を書く動機になったのは、シオニストのホロコースト歴史家がヴルバを見えなくする努力を正当化し、ホロコーストのときシオニスト運動がユダヤ人を裏切ったというヴルバのメッセージを曖昧にすることにあったようである。

1963年９月22日にヴルバが『オブザーバー』に投稿した文は、フリードランドの本では取り上げられなかった。それは、９月初旬に発刊されたアイヒマン裁判に関するハンナ・アーレントのレポートを読んで腹を立てたジェイコブ・タルモンというヘブライ大学の教授が書いた投稿文に対するヴルバの反論である。タルモンはアーレントがユダヤ人評議会に関する問題を提起し、評議会がナチのユダヤ人問題最終解決の実地に協力したという記述に腹を立てたのであった。ヴルバは「ハンガリーのユダヤ人評議会はユダヤ人に彼らを待ち構えている恐ろしい運命を警告したのか？　否、評議会は沈黙し、この沈黙の中で、一部の指導者 — 例えばカソトナーのような — が自分の親族や金持ちユダヤ人など1,684人の命と金や物品の交換取引を直接アイヒマンと行った」と書いた。

フリードランドは1961年２月に『デイリー・ヘラルド』に次のような文を書いたが、それはヴルバの回顧録から得た知識であるにも拘わらず、それに言及しなった。

「私はユダヤ人である。その事実にも拘わらず、いや、その事実の故にある種のユダヤ人指導者が、戦争中、酷い人でなし行為をしたことが許せない。この裏切り小集団は、ヒトラーのガス室で起きていることを知っていながら、そのことを仲間のユダヤ人や世界に知らせないという代償で、自分たちだけの命を守る取引をしたのである… アイヒマンが百万人のユダヤ人をガス室へ送り込む計画をしていることを３週間前にハンガリー・シオニスト指導者が知ることができた… その結果、カソトナーはアイヒマンのところへ行って、『虐殺計画を知っている。私が選ぶ何人かのユダヤ人を助けてくるなら、そのことを黙っている』と言った。」

これはヴルバに関する伝記の中で書かなかったことである。